みどり色の線

文と絵
柴岡治子

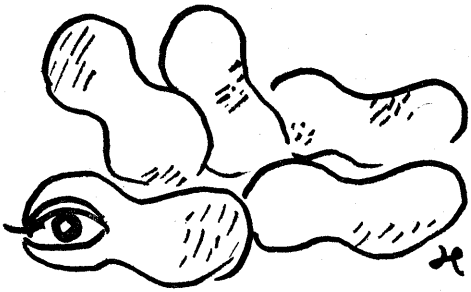
かいこを知っていますか。

おばさんが子どもの頃、ボール箱の中でかいこを飼うことがとてもはやりました。かいこは毛虫に似ているけど毛は生えていなくて、白っぽいみどり色をしてすべーっとした感じの虫です。

かいこは小さい小さいゴマ粒位の卵からかえって、もともそしていたのがだんだんに大きくなり、十ミリ余りになると体全体が透きとおってきて、不思議な気持ちにさせられます。そうしたらワラを箱の中に入れてやると又もっと不思議なことに、白いわたのような糸をはいて、だんだんに自分の体を少しも見えなくなるまであつく包んでしまいます。包んでしまった形は8形(こんな)で、まっ白で少しシワがあります。

それから美しい絹糸をとる方法はむつかしいので、大きくなってからしらべて下さい。

とにかくみんなで宝物のように、フタにポツポツ穴をあけたボール箱の



中に飼って、かいこの好きな桑の葉を近所の畑からもらって来て一生懸命そだてました。かいこが桑の葉を食べる食べ方がまたとてもおかしな感じで、見ていると何時までもあきません。あのやわらかい棒みたいな体の片方の先が頭で、口もちゃんとあるらしく、桑の葉をなぞるように上から下に動かしていると、桑の葉がけずられるように少しずつ減ってゆきます。

おばさんはそのかいこの箱を枕許において寝ました。眠る時も側におきたかったのです。朝、目をさまし、まだ寝まきのまま箱のフタを開けて見ているうちに、一匹寝床の中に落としてしまいました。

さあ大変と探しているうちに、白いシーツの上にみどり色の線をひいてつぶれているかいこを見つけました。知らないでおばさんがつぶしてしまったのです。とても悲しくて悲しさがあんまり一杯になったら、今度はこわくなってしまいました。

今でも毛の生えていない虫をみると、その時の気持ちを想い出します。そう、大きくなったかいこは指でつまむと、何だか冷たいやわらかい感じがしました。その感じが今も指の先に残っているようです。